優秀賞論文要旨

「バックラッシュ」派による「ジェンダー」批判

石　井　優　香

私は、大学に入って初めて「ジェンダー」という言葉に出会った。それを学習していく中で、実際に私自身もこれまでに「ジェンダー」（社会的・文化的に形成された性別、性差）を内面化しており、普段の何気ない行動や考え方の多くが「ジェンダー」の影響を受けていることに気がついた。そこで、「ジェンダー」という概念に大いに興味を持ち、同時に「ジェンダー」概念に対して批判をしている「バックラッシュ」派と呼ばれている人々が多くいることも知った。「バックラッシュ」（Backlash）とは、「逆流」や「反動」を意味する言葉である。2000年頃から始まった「ジェンダーフリー」教育・性教育へのバッシング現象は今も進行しており、最近では「ジェンダーフリー」概念から「ジェンダー」概念へと批判の対象は拡大しつつある。なぜ、「ジェンダー」概念が批判されているのだろうか。

「ジェンダー」や「ジェンダーフリー」という言葉、それらの意味づけや解釈は、1975年以降の国際的な女性人権運動の広がりの中で生まれた。その背景には、1979年に国連総会で採択された女性差別撤廃条約がある。日本政府はこれを1985年に批准し、この条約の第２条に裏付けられて1999年に男女共同参画社会基本法が制定された。その前文では、「男女共同参画社会の実現を二十一世紀の我が国社会を決定する最重要課題と位置づけ」られて、その重要性が強調されている。

そのような男女共同参画社会の実現に向けた動きに対し、日本では2000年代

に入ってから、保守的な立場の人々による批判や攻撃が本格的に生じてきた。これらが「バックラッシュ」派と呼ばれる人々である。具体例として、千葉県市川市における男女平等基本条例の改正、そしてその背景にある国の第２次男女共同基本計画の策定がある。千葉県の条例では、前条例である男女平等基本条例から「ジェンダー」という言葉が一切なくなり、また、第２次男女共同基本計画では「ジェンダー」という用語についての定義が二十二行加えられた。

なぜここまで「ジェンダー」が危険視されるのだろうか。日本における「バックラッシュ」派が批判している対象は、主に以下の２点である。

1）あるべき「らしさ」を否定し日本の文化や男女関係を破壊するのではないかということ。

2）教育現場において男女同室着替えや男女混合騎馬戦などが行われている。また、子どもの発達段階を無視した「過激な性教育」が行われているということ。

一点目は「ジェンダーフリー」を「男らしさ」「女らしさ」をなくし、日本のよき文化をなくすものだという批判である。本来、「ジェンダーフリー」は、性別によって不当な制限や差別をされることなく、多様な個性を選択・発揮できる状態をめざすものという意味であり、この概念を理解すれば、批判はなくなると思う。

二点目は自民党が全国的に行った調査に基づいて批判しているものである。しかし、この調査は誘導的な質問項目の使用や、件数の偽りなど、「過激な性教育」が「ジェンダーフリー」に基づいて行われていると特定するには信用に欠ける調査結果であり、「バックラッシュ」派が批判していることは筋違いであると思う。「バックラッシュ」派は、このように「ジェンダーフリー」を批判し、その元となる「ジェンダー」概念までも批判しようとしている。

二十一世紀の我が国社会を決定する最重要課題と位置づけられている男女共同参画社会の実現。いくら男女平等にむけて様々な法整備がされたところで、

肝心な人々の中にある固定観念や意識を変えることができなければ、それらの制度を本当に有効活用することは難しいだろう。生物学的な性別によって不当な扱いを受けてしまわないようにするためにも、「ジェンダー」という言葉は必要なのではないだろうか。「バックラッシュ」派の人々は批判するばかりではなく、「ジェンダー」についての理解を深めたうえで、男女共同参画社会を目指して前向きに議論をしていくべきだと思う。